

日本社会における国際バカロレア教育

—IBDP 実施校教員の分析に基づく示唆—

奥西 有理・妻谷 美来*

岡山理科大学教育学部中等教育学科

*藤井寺市立藤井寺中学校

(2022年10月31日受付、2022年12月5日受理)

1. 序論

1-1 研究の背景

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症は瞬く間に世界中に広がり、人々のライフスタイルに大きな影響を与えた。地球規模の相互依存関係は密接であり、ローカルな問題はグローバルな問題でもあることを今日ほど実感させられる時代はない。政治や経済は世界の動きや時代の流れの中で変化を余儀なくされるが、教育の分野も例外ではなくグローバル化の流れを受けて変容を求められている。

これまで日本政府は「グローバル人材」の育成を推し進めてきた。背景にはビジネスのグローバル化とそこに対応できる人材不足への危機意識があり、海外勤務を望まない若手社員の右肩上がりの増加や（産業能率大学, 2013, 2015, 2017）、海外に留学する日本人の減少（小林, 2011）といった統計データに裏付けされていた。経済の急速なグローバル化が進んでいるにも関わらず、日本の若者が以前にも増して「内向き志向」にあるという指摘がなされ、国の発展に対する懸念材料として問題視されてきた（日本経済新聞, 2013）。

産学連携によるグローバル人材育成推進会議がまとめた最終報告書（文部科学省, 2011）では、グローバル人材について「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値観を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」と説明され、育成の必要性が訴えられている。アカデミックな面での国際競争力の低下も国の科学技術発展や経済とも強く関連があり、国力の低下を招くという強い懸念から、日本政府は大学における国際人材育成に向けた政策を講じてきた。「スーパーグローバル大学創成支援事業」といったプロジェクトが立ち上げられ、採択された大学に対しては数億円規模の予算投下を行うという大がかりな国際化推進の試みが行われた（文部科学省, 2014a）。高等学校では英語教育の推進に力点が置かれたスーパーグローバルハイスクール事業もみられ（文部科学省, 2014b）、学校では英語教育の推進がグローバル人材育成の中心的施策として展開されてきた。

英語力の向上という誰にとっても分かりやすい施策から一線を画して展開された国策に、国際バカロレア（以下 IB とする）教育の推進がある。これも一連のグローバル人材育成の流れの一つであると考えることができる。IB は、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」（平成 25 年 6 月 14 日閣議決定）において 2018 年までに国際バカロレア認定校等を 200 校に大幅に増加させる目標が掲げられ、進められてきた（文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム, 2019）。文部科学省（2017）による「国際バカロレアを中心としたグローバル人材を考える有識者会議中間取りまとめ」には、国際バカロレアはスイスのジュネーブに本部を置く IB 機構が提供する「国際的な教育プログラム」であり、「全人教育を通じて、主体性を持ちバランス感覚に優れた、国際社会で貢献できる人材の育成を目的」としていることが記載されている。また、「批判的思考の探究等の特色的カリキュラムや、双方向・協働型授業を通じ、グローバル化に対応した素養・能力を育成する教育プログラム」であり、「グローバル人材の育成や、初等中等教育の質の向上、国際的通用性の観点」から、国内の IB の導入推進が取り組まれている（文部科学省, 2022）。2022 年 9 月現在で国内の IB 認定校等は 184 校に至っており、今後はその成果や課題について整理し、普及促進の意義や方策について検討を行っていくとされている（文部科学省, 2022）。

日本政府が IB 教育の推進をするに至った背景には、前述した通り国策としてのグローバル人材の育成との関係が考えられる。これに加え、世界全体の社会経済状況の変化に伴う先進諸国の教育に関する意識の変

化との関連性が指摘されている。福田（2015）によると、欧米先進国の教育内容に知識獲得から労働市場で役に立つコンピテンスの獲得という方向へのシフトがみられており、IBの提供する教育内容との距離が縮まってきているという。かつての労働者は、分業かつ低コストで大量生産する大工場で働いており、トップダウンで管理され規定の作業方式を逸脱しないよう正確に実行することが求められていた。しかしこのような低技能労働者は、所得水準が上がれば工場自体が労働力の安い海外の国に移転してしまうため、失業せざるを得なくなる。そのため先進国の労働者には、高度な知識を使いながら生産し新しい知識を生み出していく力、すなわち新製品を開発し製品化していく能力が必要である。このような能力の育成には、コンピテンス・ベースの教育を志向する教育が有利であると欧米先進諸国では考えられるようになってきているという（福田, 2015）。日本が21世紀に入ってから遭遇している社会経済的な課題の一つに労働生産性の低さがある。OECDデータに基づいて算出された2020年の日本の時間当たりの労働生産性は49.5ドルで、OECD加盟38カ国中23位となっており、1970年以降最も低い順位だったことが報告されている。就業者一人当たりの労働生産性も78,655ドルで、OECD加盟38カ国中28位であったという（公益財団法人日本生産性本部, 2021）。また日本の労働者人口は2060年には半減するとの予想も出ている。このような労働生産性に関する国際比較調査の結果や労働人口の激減予想が、日本における伝統的な教科学力観の見直しにつながっていった。労働市場で有利に働くコンピテンスを育成しなくてはならないという事情を背景にしてIB教育推進という政府判断が行われた可能性が指摘されている（福田, 2015）。

1-2 研究上の問い

21世紀に求められている能力の育成と親和性が高いという期待のもと日本で導入が推進されるようになったIB教育であるが、スイスのジュネーブで始まった教育プログラムであり欧州的教育文化を背景にもつ。そのため、「国際的」な教育というとき、実際は欧州あるいは北米といった特定地域の発想や思考に基づいた教育である可能性が高いとも考えられる。IB教育は「教育界の黒船」などと表現される場合もあるが（坪谷ニューエル, 2014）、日本固有の文化的価値観や教育環境を背景にした摩擦が体験される可能性が否定できない。日本の学校教育の独自性に関しては、国際比較研究から様々な指摘があり

（Tsuneyoshi, 1994）、欧米的な物の考え方や価値観とは教育文化的に必ずしも調和しない側面があると考えられる。特にIB教育には、知の理論（Bastian, Kitching, & Sims, 2014）に代表される徹底した論理力の鍛錬や知の探究が伴う。論理的思考力やクリティカル・シンキングの育成が学校や日常生活場面の至る所で重要視されている欧米圏と比べると、日本の教育はこれと異なった性質を持つ独自の文化圏にあるといえる。IB教育はどのように日本の教育文化の中で受け入れられるのだろうか。

もう一つの問いは、IB教育で設定されている固有の教育哲学が日本の学校が持つ固有の教育文化と接触したとき何か矛盾したものを生み出してしまうのではないかという点である。IBには、「探究する人」、「知識のある人」、「考える人」、「コミュニケーションができる人」、「信念をもつ人」、「心を開く人」、「思いやりのある人」、「挑戦する人」、「バランスのとれた人」、「振り返りができる人」という10の学習者像が設定されており、この人物像が「個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資する」と考えられている。また、「国際的な視野を持つ人間の育成」、「人類に共通する人間らしさ」、「地球を共に守る責任を認識」、「より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間」の育成も謳われている（International Baccalaureate Organization, 2013）。日本の学校の教育理念においても、国際的視野を持つ人材育成は志向され謳われることもある。また教育実践において「振り返り」が重視されている点においても、両者には重なり合いが認められる。また、日本の学校で大切にされている価値観である「他者への思いやり」も、IBの「思いやりのある人」と重なる。しかしながら、同じ言葉で語られることに実際は微妙なずれがあったり、同じ方向性を目指しているように見えることが実は異質な志向性を持っていたりする可能性は、比較文化学や異文化間コミュニケーション学的な観点からは否定できない。慎重な検討が必要であろう。IBの持つ教育哲学や教育的価値観と日本の教育のこれらとの異同やIBが導入された際の日本の教育文化との接触にまつわる現象について知見を得ることは、日本という社会文化的な文脈の中で当該教育がどのように活かされるのかに関して現実的な答えを探索する営みであると考えられる。

1-3 研究の目的

以上の2つの問いを出発点とし、本研究は質問紙調査により、実際にIB教育の実施に携わっている日本人

教員によってIB教育がどのように認知されているのかについて明らかにする。IB実施校で実際に教育を担当している教員に対して日本の教育との異同や満足感等について尋ね、日本におけるIB教育実施の利点や効果、あるいは困難な点等について考察することで、日本社会の中でIB教育が果たす役割について示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

2-1 調査協力者

西日本にあるIB認定校であるX高校（一条校¹）においてIBDP²に従事している教員4名を調査協力者とした。2010年の7月～11月に第2筆者が所属していた大学の授業担当教員を通じた縁故法により質問紙回答依頼を行い、電子メールでの回答を得た。質問紙では、IB教育実施に関する満足度や学力や人間形成の面での日本の教育との異同、長所と短所、改善できる点等について尋ねた。具体的な質問項目については表1に示した。質問紙は属性項目（年齢、性別、担当教科）と主に自由記述式の質問内容から構成されていた。調査は第2筆者の卒業研究として実施され、比較の視点を得るため、IB導入校ではない別の高校の教員に対しても同様の質問項目での調査を実施した。質問紙には、日本の教育と国際バカロレア教育の現状把握や比較を行ってそれぞれの良さや問題点を明確にすることで、国際バカロレアの教育法や学習法をどのように日本の教育に取り入れるべきかについて研究するために実施している旨、調査目的を記載した。また、回答内容については教育・研究の目的のみで使用し、匿名で取扱うこと、プライバシーへの十分な配慮を行うことを確約した。

表1 IB教育に関する実施校教員への質問

・国際バカロレアの教育に満足していますか。また、そう思う理由を教えてください。
・満足度（以下の中で当てはまるものに1つ○を付けてください。） 非常に満足-まあまあ満足-普通-あまり満足していない-全然満足していない
・上記の選択肢を選んだ理由をお書き下さい。
・国際バカロレア校から見て、日本の教育の中で、国際バカロレアと似ている点、違っている点は何だと思えますか。
・国際バカロレアの長所と短所は何だと思えますか。
・国際バカロレアの教育について改善できるところがあるとしたら、どのような部分があると思えますか。
・あなたは国際バカロレアのカリキュラムを受けた生徒と日本の知識伝達型の授業を受けた生徒では、学力や人間形成、その他の面で違いがあると思えますか。違いがあるとしたら、具体的にどのような学力や人間形成、その他の面で違いがあると思えますか。
・国際バカロレア式を従来の日本の教育に取り入れるとどのような変化があると思えますか。
・国際バカロレアの教育方法を日本の教育に取り入れるべきだと思えますか。国際バカロレアのどのような部分を取り入れると良いと思えますか。

2-2 分析

得られた自由記述式の回答をエクセルの表に全て書き写した。読みやすさを確保するため、文末を「です・ます調」から「である調」に変えたり、繰り返されている表現や接続詞を削除したり、長い文章を句点で分けたりといった調整を行った上で、それぞれの自由記述の内容について質的に分析シラベルを付与した（表2、表3、表4、表5、表6、表7、表8）。付与したラベルについては、それぞれの回答の最後に【括弧】に入れて配置した。また、同じ種類のラベルを並べて配置した上で、《タイトル》を付けた。

¹ 一条校とは、学校教育法の第1条に定められている学校をいう（学校教育法, 1947）。

² IBDPとは国際バカロレアのディプロマプログラム（Diploma Programme）を指す。16歳～19歳までを対象とし、所定のカリキュラムを2年間履修して最終試験を経て所定の成績を収めると国際的に認められる大学入学資格（国際バカロレア資格）が取得可能なプログラムである。他にも3歳～12歳までを対象としたPYP（Primary Years Programme）と11歳～16歳を対象としたMYP（Middle Years Programme）がある（文部科学省IB教育推進コンソーシアム, 2022）。

3. 結果と考察

回答者4名の属性は20代～50代で、担当教科は言語系及び理数系であった。少数の事例研究であるため個人のプライバシー保護の観点から、性別と担当教科の具体についての明記は避けることとする。国際バカロレア教育の満足度については、「非常に満足」が1名、「まあまあ満足」が2名、「普通」が1名であった。それぞれの満足度に関連した理由は表2に示した。

表2 IB教育の満足度の理由に関する回答

<p>《教師の成長》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員も楽しい。生徒と一緒にまだ成長ができる。【教員の成長】 ・ 教科担当としての幅は広がっていると感じる。【教科指導の幅の広がり】 <p>《コンピテンスの育成》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担当している科目において日本で言うところの「生きる力」の醸成がよりよく目指されていると感じる。【生きる力の育成】 <p>《学力形成面での不十分さ》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「国語」的観点での教育が十分にできない。日本語の中等教育の指導としては内容に疑問を感じる節がある。【日本語教育の不十分さ】 ・ 研究者の基礎を固めるといふ点では日本のカリキュラムには劣ると感じる。【基礎学力の形成に関連した不十分さ】 <p>《不平等》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ バカロレアの理念は万人に向けられた普遍的なものであるように説かれるが、誰もが受けられる教育たり得るかは疑問であり、その点に説得力を欠く。【受益者の限定】
--

IBの満足度については、教師が楽しめることや教科指導の幅が広がるといった肯定的回答が得られた一方で、緻密に積み上げていく基礎学力の形成という面では不利な点があることが指摘されていた。一方で、「生きる力」の育成に資するという指摘があり、IB教育が点数化できる見える学力には不利に働く可能性がある一方で、コンピテンスに関連した見えない学力の形成に貢献する可能性が示唆されている。不平等性についての指摘もあり、これはIB教育を受けるには金銭面の負担が伴うことから、経済面で誰もが受けられる教育ではないことについて矛盾点の指摘ではないかと推測された。

表3 IB教育の日本の教育との異同に関する回答

<p>—似ている点—</p> <p>《大枠の考え方と仕組みの共通》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 最後にテストがある。【テスト有】 ・ 教育理念（但し、国民の育成を前提とするかどうかという大きな違いも一方ではあるため、結局はスタンスが大きく異なっていると感じる。）【教育理念の重なり】 ・ 昨今新しい学力観として重視され始めている部分は、国際バカロレア教育の教育に近いと感じる。【学力観の一部重なり】 <p>—異なっている点—</p> <p>《現代的教育メソッドの採用》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ICTを積極的に使う。【ICT活用】 ・ 現代の社会に使うような問題を使う。データで読み取る作業が多い。【社会的データの読み取り】 <p>《高レベル・高負担》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な知識を膨大に積み重ねなくては最終的なテストで結果を出せない。【膨大な知識の積み重ね必要】 ・ 訓練が多い。【訓練必要】 ・ 学力が一定のレベルに達しない場合、全く対応できない問題が多い。簡単な問題はない。【高難易度】 <p>《根本的相違》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ そもそもが日本の教育と違う。【根本的相違】 ・ 国民の育成を前提とするかどうか。ここが根本的に違うため、必然的に教育内容やスタンスには大きな違
--

いが見られる。【否・国民教育】

IB教育と日本の教育の異同に関しては、教育理念や学力観やテストがあることなど、大枠の仕組みや考え方において大きく異なるところはないと認識されていたが、一方で国民教育を前提としている日本の教育とは根本的な違いがあるとの指摘もあった。表2で示した回答には、基礎学力の形成面で難点があることが指摘されたIB教育であるが、異同に関する質問の回答においては(表3)、日本の教育に比べると難易度が高く、膨大な知識や訓練が必要となる面が指摘されていた。ICTを積極的に活用したり現代社会の問題を取り上げてデータで読み解いていくといった特徴も、日本の教育と異なる点として指摘されていた。

表4 IB教育の長所および短所に関する回答

－長所－

《実社会で有利》

- ・社会で役立つことが多い。【実社会で有利】
- ・国際理解と日常を意識したカリキュラム設計がなされているため、社会で生きるための素養の育成は日本に比べて優れていると感じる。【実社会で有利】
- ・教科や前提に縛られすぎない横断的な学習、思考のスタイルを許容しており、より実社会に近い学習になりやすい。【実社会で有利】

《評価の明確さがもたらす利点》

- ・評価内容や評価方法が明言されているところ。日本では学習指導要領の解釈が個人レベルに任されることがある。【評価の明確さ】
- ・最終的な評価の方法が明確に定まっており、そこに至るプロセスには自由度が高い。評価の方法(Final Examの問題やIAのクライテリアなど)が工夫されていることで、日々の授業で知識以外の多様な学習体験を行う必然性が生じている。【多様な学習体験】

《高い将来性》

- ・日本在住の生徒のうち、将来的に国を選ばずに活躍したい者にとっては、現状では他に類を見ない有用なコースとなっている点。【グローバルな活躍に有利】
- ・評価が甘い傾向にあるため、国内大学に入学したい生徒にとっても、現状では特に進学を決められるコースとなっているように見受けられる点。【国内大学進学に有利】

－短所－

《日本語にまつわる不利益》

- ・日本語での教科書がほぼ存在しておらず、学習到達度の限度が測りにくい。【日本語教材不足】
- ・日本語のテキストがない。日本人教員もある程度の英語を理解する必要がある。【日本語教材不足】
- ・2か国語で行うことを必須とするため、母国語(思考言語)の基礎が身に付いていない場合にどちらつかずとなり、思考力の育成が難しくなる点。【母国語力不足の場合の思考力形成困難】
- ・欧米での学習に適した学習方法になっている点。言語面では、多様な文字と変則的な文法を持つ日本語の学習に際しては、基礎的なトレーニングの絶対量が足りない。文学面では、実証主義的な日本の国文学研究においては主流でない「文学理論」の学習を無理矢理適用しようとしている点にも違和感を覚える。【日本語学習に不利】

《一般地域社会との乖離》

- ・受けられる生徒を選んでしまう点。受益者側に費用がかかりすぎる点。【経済的不平等】
- ・(各国の言語や文化の障壁による有利不利を無くそうとするあまり)実は各国の文化に対して非常に不寛容な傾向がみられる点。「国境を超えた課題」に焦点化しすぎている。「国境を超えて活躍すること」を前提とする学習者を想定しているため、地域人材の育成には向かない。【地域人材の育成に不利】

《学習遂行に伴う必然的不合理》

- ・自己目的化した課題がしばしばみられる。例えば、日本の教育においてもそうであるが、本来は目的達成のための「手段」であるはずの「比較」を「目的」とした課題が見受けられる。これだとただの知的高等遊戯の域を出ない。【学習課題の自己目的化傾向】
- ・深く学習しすぎる事により、Final Examの採点基準にうまく合わせられないことも生じやすい。幅広い学習到達度に合わせすぎるあまりか、採点の基準の中には簡単すぎるものも多く、逆に得点にできないこと

もある。高い配点の問題では、優れた解答ではあるが点数にならないという不公平は生じるとされる。

【評価と学習の達成のミスマッチ可能性】

《日本型教育体系からの逸脱性による不利益》

- ・現時点での日本の大部分の受験に対してマッチしていない点。【日本型大学入試に不利】
- ・一つの学問を追求するには至らない点。【学問追求不十分】

IB教育の長所と短所に関しては、IBの学習は社会で役立つ学問内容となっており社会的実践力を身に付けるという面において有利であることが認識されていた。またグローバル社会での活躍や海外の大学入学に有利というだけでなく、日本国内の大学進学にも有利に働く可能性があり、生徒の将来を拓く教育であるという評価がされていた。その一方で、日本語の学習面が不十分な場合はそこから派生する思考力の育成も困難になってしまったり、日本語教材が不足しているといった、日本語にまつわる不利益があることも認識されていた。また、グローバルな活躍を志向した学習内容が展開されることの裏の側面として日本の地域社会で活躍する人材の育成には向かない面があることや、経済的に恵まれている生徒のみが学習に参加できるという現状にあるというローカルとの乖離性が指摘されていた。その他にも、日本の大学の多数の入試に合っていないことや、緻密に整備された日本の学習カリキュラムとは異なった特徴があり、体系的な学問追求という面では不十分であるという指摘もあった。また、徹底した知的探究活動や批判的思考の駆使は目的が置いていかれてしまいそのこと自体自己目的化してしまうことがあったり、学習内容が評価に公平に反映されにくいことがあるといった、IB教育の実施において必然的に生じがちな不合理性についての指摘もあった。

表5 IB教育の改善すべき点に関する回答

《ローカル言語への配慮》

- ・日本語訳【日本語教材必要】

《多様な人々への普遍性》

- ・グローバリズムに対する確証バイアスに陥っているように見受けられ、その思想の問題点について自己批判ができていないように見受けられる点。現状でその思想や志向を本質的に持たない国々や、その国のもとで教育を受けた人たちとどのように上手に共生していくかという問題について、もっとよく考えなければならないはずだと考える。【グローバリズム偏重の改善】
- ・日本語の教科書がないためシラバスを頼りに学習を進めているが、ある種独特と思われるようなトピックもある。科学分野の学習内容は普遍的なものであるため、多くの地域の意見を取り入れて改善され続けることが必要。【科学分野の学習内容の普遍化】
- ・導入時に必須となる初期費用を下げる。【コスト引き下げ】

IB教育の短所についての自由記述回答と内容が重なるが、改善すべき点についての回答を表5に示した。IBDPの教科書は英語で書かれているものが多く、少数派言語である日本語による教材が不足しているため、そこへの配慮が改善点であるとする意見があった。また、様々な人に対して普遍的であり通用性があるかという点に関してはそうとはいえず、カリキュラムの面だけでなく、経済面や、非グローバリズム志向の人々との共生という観点において改善の余地があることが指摘されていた。

表6 IB校生徒と非IB校生徒の比較に関する回答

《人間性形成志向の教育》

- ・国際バカロレアのプログラムは受け身の姿勢では難しい。生徒が積極的に授業に参加する、課題に取り組む姿勢が大事。学力を測るための模試があるわけではなく、偏差値がでないのが数値として表すのは難しいのではないかと。これからの社会では役立つのではないかと。【積極性や参加重視vs. 偏差値重視】
- ・学力面では、文章構成や言語活用などの発信型の能力は国際バカロレア教育でより育成されると感じるが、基礎的なドリルトレーニングを中心とする日本の教育の方が、基礎学力や緻密な情報処理能力が育成されると感じる。【発信型能力育成vs. 確かな基礎学力育成】
- ・学力や人間形成という言葉の定義にもよるが、特に「人が見える知識」という点に大きな違いが生じると考える。バカロレアで実施される科目では、知識とそれを取り巻く人々に焦点を当てることに重点が置かれ

ている。例えば、担当しているx科目においては、「人がデータを読み解く」ことが重視されており、日本型のカリキュラムに比べて、より統計分析や背景の考察をさせるような内容が重要視される。この結果として、「知識に関わる人」が常に見える形で学習が進むため、「人が生み出し、使用する知識」という視点が身に付く。TOKではそもそもが「人と知識の関係」を考察することが一つの目標であり、他教科でもその根幹をなしている。これらが実現することが学力や人間形成の一端を担っている、というのならその違いは明らかであろう。【人中心の知識獲得vs. 必ずしも人中心ではない知識獲得】

・基本的にIBクラスの生徒はモチベーションも能力も低くはないが、最終的な到達点に向けて応援するというスタンスが取りやすい。逐一、細かな注意を受け過ぎないことは伸びるためには重要なのではないかとと思われる。日本のカリキュラムにおいて生徒を評価する場合、本質的なものではないが普段からの課題の取り組みなどについてコンスタントに最良の状態になれば最高の評価は得難い。高1年次は低空飛行したが高3では見違えるように良くなった、という事例があった場合、3年間を通しての評価はAはあり得ず、BかCである。それゆえに、どの段階においても失敗を許容できない状態が日本の教育では起こりがちになると思われる。【大局的な学力形成支援が可能vs. 完璧主義的な学力形成支援が必要】

《優れた理系教育》

・学問の内容を突き詰め、深めるという観点から学力を見た場合には、特に数学・物理においては日本の方が優れていると感じる。【不十分な理系学問追求vs. 十分な理系学問追求】

《日本的協調性の未熟》

・人間形成の面では行動力を備えた人間が育つ一方、ローカル人材に対して無関心な傾向がある人間が育つと感じている。また、地道な作業を嫌う人間（悪い意味での「温室育ち」）が育つ傾向もあると考える。日本の教育を受けた生徒は、保守的・内向的な傾向はあるものの、身近な人間との協働・共生は苦なく出来る人間に育つのではないかと感じる。【行動力ある人材育成vs. 日本社会向き地域人材育成】

IB校生徒と非IB校生徒の比較に関する回答からは、IB教育が生徒の人間性形成に大きく貢献する可能性があることが示唆されている。発信力や積極性といった、グローバル社会で他者と関わりを持つことに有利な能力が育成される可能性が高いと考えられていた。学習の支援においても、最終ゴールを意識した大らかな学力形成指導が日本の教育と比較して可能であることが窺えた。日本の高校生の自己肯定感の低さについては、近年国際比較調査で指摘されるようになってきているが（国立青少年教育振興機構、2015）、偏差値を意識しながらあらゆる科目の試験において完璧を目指すことを促されることは、チャレンジすることよりも失敗しないことに意識が向きがちであるため、自信の無さや自己肯定感の低さにつながっていくのだろうと思われる。この点について、完璧主義が随所で発揮される必要のないIB教育は、日本人生徒の自己肯定感の改善に有効な解決策を提供するのかもしれない。しかしながら、IB教育に従事している教員がIBの利点について盲目的に評価していない点は注目に値する。日本の教育の下で育った人材について、内向的に見えても身近な人間とスムーズに協力することができることを優れた点であると評価している。また科学技術立国としての日本の理系学問の優れた点についても明確に認識されていた。

表7 IB教育の方式を日本の教育に取り入れた場合に起こりうる変化に関する回答

《取り入れに対する後ろ向き評価》

・すぐに変化が見られるとは思わない。【変化なし予測】

・日本の教育に取り入れようとしても、最終的な日本の評価方法が変わらなければ変化は定着しないと思われる。【変化の定着なし予測】

・先述のような短所の存在により、大局的に見れば、日本独自の文化がやせ細っていくと考える。性格・性向面では、行動の発信を積極的にする人間が増える反面、緻密な作業を苦手とする人間が増えると考えられる。【日本文化への弊害予測】

IB教育の方式を日本の教育に取り入れた場合に起こりうる変化について尋ねた質問では、回答したどの教員からも前向きな回答は得られなかった。IBの教育方式を単純に取り入れようとするだけでは十分でなく、日本の社会文化的事情や日本の教育制度全体との関係で考えなければ、前向きな変化は期待できないことが予想されていた。また、IB教育には短所もあるため、日本の教育の下での人材育成の良さが阻害されてしまう可能性も指摘されていた。

表8 IB教育を取り入れるべきかに関する回答

《全体的に考えて取り入れる必要性》

・取り入れるためには、色々な組織や先生を育成しないと、取り入れても変わらないと思う。【組織や教員育成の必要性】

・教育方法だけを取り入れるのではなく、バカロレアの理念やバカロレア教育を受けた生徒が受け入れられる社会システムなども併せて取り入れることができるのが望ましい。【社会システム変革の必要性】

・大学、企業、社会がどのような人材を欲しているかを再度考えたうえで、それぞれの試金石としている要件（入試問題、採用基準等）について大きく変えるのでなければバカロレアの教育方法を取ることは形骸化すると考える。【より広い組織や社会の変革の必要性】

《日本の教育との両立性困難》

・批判的な考え方、一から考える力、論理的に説明する力などを評価しようとする部分は取り入れるべきかと思うが、日本の高校教育まで積み込んでいる知識の部分でそぎ落とされている部分が多いことも知るべき。良い所だけを見習おうとするのは危険だと感じる。【日本の教育との両立性困難】

・本質的な部分においては取り入れるべきだとは思わない。国際バカロレア教育は、グローバル教育を志向しており、国ごとの違いに重点を置かず国境を超えた課題に焦点化する傾向が顕著。世界平和を希求しつつも、日本文化の継承や国民の育成を標榜している日本の教育とは本質的な部分において実は相容れないと感じている。目指すところが違えば、適した方法も変わる。理念の面においては、国際バカロレアはむしろ日本の教育とは別のものであるという認識をきちんと持ってもらうなければならない（その上で、被教育者に選択してもらわなければならない）と思う。まずは、日本の先人が残した多くの優れた教育実践から理念ごと学んだ上で、それと比較対照できる観点を備えてから国際バカロレアを含めた他国の教育に触れるのが良いのではないかと思う。【日本の教育との両立性困難】

表8に示した日本の教育にIB教育を取り入れるべきかについての回答からは、表7に示した回答と同様、IBが便利な教育メソッドとして日本の教育の中に取り入れられることについての否定的な意見が目立った。IBDPで実際に生徒の教育にあっている教員にはIB教育と日本の教育の共通性よりも、むしろ互いの異質性が際立って意識化されている。取り入れるとしても、やり方の一部を取り入れることによる効果はあまり期待できず、組織や制度を変えたりそれに適した人材の育成も併せて行っていくことが必要であると認識されていた。IB教育を前向きに推進する政府見解だけでは予想できなかった矛盾点や文化的葛藤に関する見解が得られた。

4. 総合考察

IBDP認定校において教育現場の最前線で生徒の教育にあっている教員から得た質問紙の回答からは、IB教育と日本の教育に関する興味深い示唆が多く含まれていた。IB教育に従事している高校教員は、その教育の利点を十分に理解しつつもIBの教育方式を日本の教育の中に取り入れることについては、必ずしも前向きに捉えてはいなかった。これはIB教育が学習者像や理念を含んだ全体的なものとして捉えられるべきものでありその教育メソッドだけを単純に取り入れようとするのが困難であること、部分的な取り入れではその利点が十分に活かされない可能性があることを示唆している。日本の社会的・教育的環境が根本的に変わっていかなければ、ユニークな教育メソッドの一部を取り入れても良い変化を起こすことにはつながっていきづらいということが示されたといえるだろう。

別の興味深い点は、国際的な人材の育成を願いながら作られたIBの教育カリキュラムが、国境を超えるという価値観に焦点化しすぎてしまったとき、グローバリズム偏重主義的になってしまうという矛盾点がIB教育実践者によって認識されていたことである。IB教育の最前線の教育現場に立つ教員は、IB教育を盲目的に受け入れているのではなくクリティカルな目で見ていた。併せて日本の教育や日本の文化について、その独自性への肯定的側面が認識されていた。これは一見矛盾しているようであるが、IBという海外文化にルーツを持つ教育に従事したからこそ、自国文化の教育の利点の再認識が起こった可能性があると考えられる。

本質問紙調査結果から得られたもう一つの非常に興味深い点は、IBDP教育に従事する教員がその教育経験を通して、IB教育の「良いとこ取り」や「ブレンド型教育の創出」を志向するようにはなっておらず、むしろ

る両者のメリットデメリットが明確に分析され、両立には困難さが伴うことについて認識されるようになっていたことである。その上で、どちらかを取るという「選択」の発想が生まれている。これは日本政府が目指してきた方向性との齟齬がある可能性を示唆している。文部科学省（2012）は「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進」において、「国際バカロレアの趣旨のカリキュラムは、思考力・判断力・表現力等の育成をはじめ学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、日本再生戦略（平成24年7月31日閣議決定）が掲げる課題発見・解決能力や論理的思考力、コミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な修得に資するもの」であるとし、日本において「国際バカロレアの趣旨を踏まえたカリキュラムや指導方法、評価方法等に関する調査研究を行い、我が国の教育の改善に活かす」と記している。「グローバル志向」であるということは、「日本的」であることを否定するものではないはずであるが、教育実践においては二者択一的にならざるをえない場面が、現実的にはあるのかもしれないということを研究結果は示唆している。欧州で開発された教育プログラムには、日本で生まれ育った生徒の思考回路には馴染みにくい要素があるのかもしれない。本研究の調査協力者は、IB教育が日本の社会文化的な環境の下で実施された時に生まれる得失について明確に意識し受け止めていた。同時に明治時代以降確立されてきた日本の伝統的な教科教育についても（国立教育政策研究所、2012）、利点の再認識が行われ、IB教育と日本の教育それぞれに対して優劣評価ではない本質的理解が可能となっていた。

以上のように、本研究では調査協力者の教員から日本の教育環境へのIB教育の安易な取り入れに対して慎重な意見が出されたが、日本の教育課程がIB教育の導入によってより建設的に活かされるとする報告もある。渋谷（2013）は、中等教育課程においてMYPを実践している学校への聞き取り調査を行った結果、IBDPのような教科内容の規定がないMYPの場合について日本の教育とも親和性があり、導入することで特別活動といった教科外学習をよりグローバル志向性をもったものに変容させることができ、これにより学びの質が高まることが期待できるとしている。

IBDPに関しては前掲したとおり、海外の大学へ進学し世界をまたにかけて仕事をしたいと願うグローバル志向の生徒にとっては、積極性や発信型コミュニケーション能力が身に付き有利に働くと認識される一方で、日本らしい良さが削ぎ落されてしまうことへの懸念が示されていた。この点に関しては、人材育成も実際は、何かを獲得しようとするれば何かを切り捨てざるをえないという選択が伴うということなのかもしれない。人材育成の目的について大きく捉え、一つの社会の中に異なった役割のある多様な人材を育成することであると考えることができれば、安易に教育のブレンド主義に陥る必要はないのかもしれない。日本の教育の良さとは異なるがグローバルエリートを育てる教育としての固有の役割がIBにあるのなら、日本社会に多様性を生み出していく一つの有効な手段として位置づけることができるのではないかと思われる。

最後に本研究の限界について述べる。本研究の質問紙調査の結果からは示唆に富む貴重な知見が得られたが、4名という限られた人数のIBDP校の教員を対象とした事例的研究であり得られた知見には限界がある。PYPやMYPも含んだ日本のIB教育実施の全体像が概観できるものではなく極めて限定的なものであるといわざるをえない。今後調査対象者を広げて更に調査が進み、知見の一般化が行われることが望まれる。

謝辞：お忙しい中質問紙調査の回答にご協力いただいた先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- Bastian, S., Kitching, J., & Sims, R. (2014) *Theory of Knowledge 2nd Edition*. Pearson Education Limited. (大山智子(訳) 後藤健夫(編) (2016) セオリー・オブ・ナレッジ世界が認めた「知の理論」ピアソン・ジャパン株式会社
- 福田誠治 (2015) 国際バカロレアとこれからの大学入試改革—知を創造するアクティブ・ラーニング 亜紀書房
- 学校教育法 (1947) 第一章総則第一条 <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=322AC0000000026> (2022年10月24日閲覧)
- International Baccalaureate Organization(2013) IBの学習者像 <https://ibconsortium.mext.go.jp/wp-content/uploads/2019/04/IB%E5%AD%A6%E7%BF%92%E8%80%85%E5%83%8F.pdf> (2022年10月27日閲覧)
- 小林明 (2011) 日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策 ウェブマガジン「留学交流」2011年5月号 Vol.2 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/akirakobayashi.pdf (2022年10月26日閲覧)
- 公益財団法人日本生産性本部 (2021) 労働生産性の国際比較 2021 <https://www.jpcc-net.jp/research/detail/005625.html> (2022年10月23日閲覧)
- 国立教育政策研究所 (2012) 我が国の学校教育制度の歴史について https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/kenkyu_01.pdf (2022年11月24日閲覧)
- 国立青少年教育振興機構 (2015) 高校生の生活と意識に関する調査報告書(概要) —日本・米国・中国・韓国の比較 <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/98/File/gaiyou.pdf> (2022年10月30日閲覧)
- 文部科学省 (2011) 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略 平成23年4月28日 産学連携によるグローバル人材育成推進会議 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (2022年10月24日閲覧)
- 文部科学省 (2012) 国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoiku_kenkyu/index.htm (2022年10月30日閲覧)
- 文部科学省 (2014a) 平成26年度スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」公募要領—我が国社会の国際化を先導するグローバル大学30校を創成 https://www.jsps.go.jp/j-sgu/data/download/01_sgu_kouboyouryou.pdf (2022年10月26日閲覧)
- 文部科学省 (2014b) スーパーグローバルハイスクールについて https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/ (2022年10月24日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 国際バカロレアを中心としたグローバル人材を考える有識者会議中間取りまとめ https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/26/1385712_001_1.pdf (2022年10月25日閲覧)
- 文部科学省 (2022) 国際バカロレアの普及促進に向けた検討に係る有識者会議 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/22ec.html (2022年10月25日閲覧)
- 文部科学省 IB教育推進コンソーシアム (2019) 国際バカロレアについて https://ibconsortium.mext.go.jp/wp-content/uploads/2019/04/%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E8%B3%87%E6%96%99_%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E3%83%90%E3%82%AB%E3%83%AD%E3%83%AC%E3%82%A2%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf (2022年10月30日閲覧)
- 文部科学省 IB教育推進コンソーシアム (2022) DP (ディプロマ・プログラム) <https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/dp/> (2022年10月30日閲覧)
- 日本経済新聞 (2013) 日本人の海外留学1%、内向き鮮明 OECD調査 https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG25045_V20C13A6CR8000/ (2022年10月26日閲覧)
- 産業能率大学 (2013) 第5回新入社員のグローバル意識調査

<https://www.sanno.ac.jp/admin/research/vbnear0000000lg3-att/global2013.pdf> (2022年10月26日閲覧)

産業能率大学 (2015) 第6回新入社員のグローバル意識調査

<https://www.sanno.ac.jp/admin/research/vbnear0000000q91-att/global2015.pdf> (2022年10月26日閲覧)

産業能率大学 (2017) 第7回新入社員のグローバル意識調査

<https://www.sanno.ac.jp/admin/research/fm3fav0000000hbz-att/global2017.pdf> (2022年10月26日閲覧)

渋谷真樹 (2013) 日本の中等教育における国際バカロレア導入の利点と課題ー特別活動に着目して 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 22, 87-94.

坪谷ニューエル郁子 (2014) 世界で生きるチカラー国際バカロレアが子どもたちを強くする ダイアモンド社

Tsuneyoshi, R. (1994) Small groups in Japanese elementary school classrooms: Comparisons with the United States. *Comparative Education* 30(2), 123-127.

,

International Baccalaureate Education in Japanese Society

— Implications Based on Analyses of IBDP School
Teachers —

Yuri Okunishi and Miku Tsumatani*

*Department of Secondary Education, Faculty of Education,
Okayama University of Science*

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, Japan

**Fujiidera Municipal Junior High School*

2-9 Mifune-cho, Fujiidera-shi, Osaka 583-0021, Japan

(Received October 31, 2022; accepted December 5, 2022)

This study aimed to gain insight into the role of International Baccalaureate (IB) education in Japanese society. Four teachers engaged in IBDP at X high school, an IB-accredited school in western Japan, participated in the study. The questionnaire included questions on teacher satisfaction with the implementation of IB education, differences from Japanese education in terms of academic achievement and human development, its strengths and weaknesses, and points to be improved. The results indicate that the teachers engaging in IB education analyzed gains and losses of the education clearly from critical perspectives. However, while there was a positive evaluation regarding its advantages on the development of globally minded individuals with an active attitude and good communicative skills, there were also aspects incompatible with the development of local human resources. In addition, cautious views were expressed regarding easy incorporation with conventional Japanese education. Finally, the role of IB education in Japanese society was discussed.

Keywords: International Baccalaureate Education, Japanese school culture, Japanese education, global human resources development